

鳥取大学研究成果リポジトリ

Tottori University research result repository

タイトル Title	「一式飾り」探訪記：第18回 「一式飾り」がつなぐ地域の絆
著者 Author(s)	Takahashi, Kenji
掲載誌・巻号・ページ Citation	島根日日新聞：5 - 5
刊行日 Issue Date	2018-09-26
資源タイプ Resource Type	論文 / Article
版区分 Resource Version	出版社版 / Publisher
権利 Rights	注があるものを除き、この著作物は日本国著作権法により保護されています。 / This work is protected under Japanese Copyright Law unless otherwise noted.
DOI	
URL	http://repository.lib.tottori-u.ac.jp/6245

「一式飾り」探訪記

鳥取大学地域学部准教授 高橋 健司

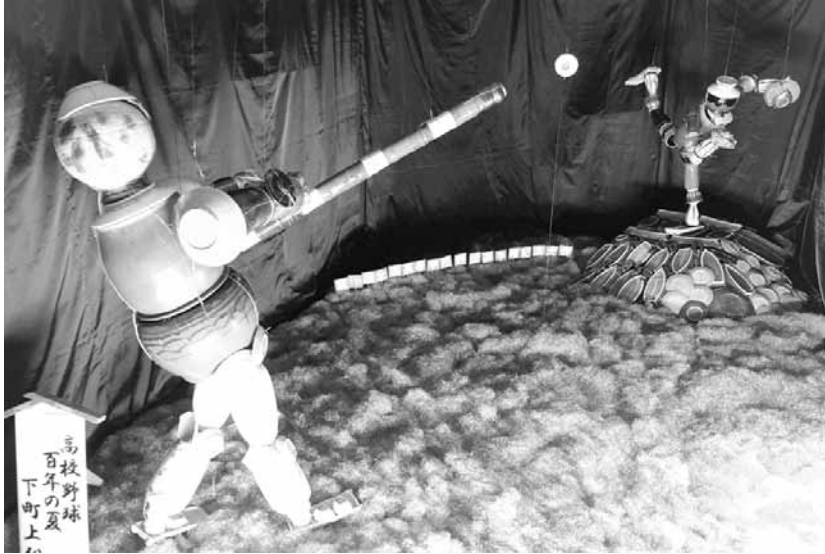
第18回

今年の夏は高校野球の第100回の記念大会が開催され、甲子園で熱戦が繰り広げられた。その準決勝で日本中が盛り上がった8月20日、雲南市掛合町の掛合で開かれた「恵比寿祭り」で、早くも高校野球をテーマにした「一式飾り」の作品と出会った。

写真をご覧いただきたい。作品名は「高校野球 百年の夏」。マウンド上のピッチャーが投げた球を、バッターが打ち返した瞬間を捉えている。この躍動感あふれる作品を作ったのは、掛合の下町上組の人たち。陶器一式を用いて巧みに表現した。

「一式飾り」は世相を映すとされるが、話題性のあるタイムリーな作品は、観客の記憶に深く刻まれる。またメディアの発達していない時代に

「一式飾り」がつなぐ地域の絆



は、作品がニュースのような働きをしていたかもしれない。見られた。

若者や子どもたちの姿もたくさん見られた。

この日は月曜日であったにもかかわらず、夕方から大勢の人が町をぞろぞろ歩き、各組の作品を眺めていた。

山間(あい)に位置する掛合町では、人口が3000人を下回り、「一式飾り」を飾る掛合の上町、中町、下町では、合わせて200人しか暮らしていない。

そんな普段は人通りもまばらで静かな町が、「恵比寿祭り」の日は一変して、にぎわいを見せる。その理由を、掛合一式飾り保存会の会長の竹下紘一氏に伺った。

竹下氏によれば、町を出た多くの人たちが、お盆ではなく「恵比寿祭り」に帰って来るとのこと。祭りには、里帰りした子どもたちが担ぐ神輿(みこし)も登場する。掛合の人たちにとって、毎年8月20日は年に一度の特別な日なのだ。

実際に町をくまなく「おかえり」、「久しぶり」という声を耳にした。掛合に里帰りした人たちは、懐かしい風景や顔見知りの人たちとの再会を果たすために、「恵比寿祭り」に集まっている。昔ながらの「一式飾り」を眺めて、

ふるさととの絆を確かめてい

るようになっている。

その一方で、掛合では「一式飾り」の制作者が減り、新たな材料を購入することもなく、持ち合わせの材料だけで、何とか作品の制作を続けている。

それでも「一式飾り」をやめようとするのは、作品の制作が地域の交流の場となり、制作を共にする人たちと一杯飲むなど、付き合いを保つことができるからだ、竹下氏に伺った。制作の際に、一人暮らしのお年寄りに声を掛ける組もあるという。まさに「一式飾り」が、地域の絆をつなぐ役割を果たしている。

今年の「掛合一式飾り」の作品数は7点と多くはないが、昨年と比べると1点増えた。地元の中学生による作品が復活したためである。スケートの羽生結弦選手の「フィギュア王者の舞い」という作品を、中学生が地域の人たちに教わりながら完成させた。

今後も「一式飾り」の制作を通して世代間の交流を深め、若い世代に地域の絆を肌で感じてもらうことを願う。

感じてもらうことを願う。